In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	ベン・ジョンスンの文学批評 ： 詩論を中心として
Author	杉本, 龍太郎
Citation	人文研究. 17 巻 1 号, p.21-34.
Issue Date	1966
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

ベン・ジョンスンの文学批評

―― 詩論を中心として ――

杉　本　龍　太　郎

I

文学批評史，すなわち，文学批評の歴史というものが理念的に存在しうるか否かということはたしかに問題である。しかし，そのような歴史的研究に必然的に伴う，環境とか当時の読者層とかを捨象しうると仮定して，骨組みとなるいわゆる図式だけを想定してみよう。すると，イギリスの批評には三つの断層，もしくは 'turning point' ともいうべきものがあることがわかる。すなわち，イギリスルネサンス期の批評と Francis Bacon, Ben Jonson のあいだ，Johnson 博士と S.T. Coleridge のあいだ。もう一つは，Oscar Wilde と T.E. Hulme, T.S. Eliot とのあいだ，この三つである。この姿は，もちろん，運動している流動体を静止的な図形でとらえた，いわば図式上の手品といわなければならない。実際には，そのあいだに無数にそれを繋ぐ要素があり，前述の批評家自身の中にも前後を連繋する要因があるからだ。とくに，私がいま取りあげようとしている Ben Jonson には，前代の Sir Philip Sidney の批評理論の展開だととるべき部分が多い。だから，もし上述の図式を設定するとしても，その層の岸辺はより Bacon あるでといいたいのだ。このことが私のこの小論の結論を予定せしめるものである。

もちろん，Jonson も Bacon からかなり影響をうけた。ある意味では，'the student of Bacon'[1] ともいいうる。あらゆる人間はそれなりに過渡期の存在だともいえるだろうが，私は Ben Jonson の詩論の中に前代，Sidney や Bacon のどの説をうけとめ，展開させ，後の例えば John Dryden などに引きわたしたかを検討してみたい。一つの批評史的な流れの中で座標を決めようとするものである。

Ben(jamin) Jonson (1572？―1637) の生涯の大部分は劇場を中心としたものであったことは周知のことだ。しかし，彼は James の寵を得て，'poet laureate' に任じられたこと，若干の批評書を残したこと，Inigo Jones とともに 'masque' を創作したこと，等，文学の種々の面に足跡を残した人だった。例えば *Every Man in His Humour* の 'prologue' で "To make a child now swaddled, to proceed/Man, and then shoot up, in one beard and weed,/Past

threescore years;..."[2] というときには，例の「三一致の法則」を破っている者に対する諷刺であり，自己の態度を表明する批評であるように，彼の特色は，その学問，ことに古典に対する豊富で正確な知識であった，といえよう。彼の批評態度もこの線上に時点をもっているのである。

さて，Jonson の文学理論構成の基盤は古典であるとして，直接の影響を与えたものは，Sidney の *Defence of Poesie* であった。この書物により，Jonson は詩の dignity，劇に対する認識，その古典的視野を得たとまで考えられている。さらに，彼は自己の批判の基準にできるものをいろいろの書物から求めた。その中でも，彼は自分の思考体系を Horace の *Ars Poetica* にあわせて構成しようと考えていた。だから Jonson の批評はいわゆる権威に基いたものだった。彼の文学に対する考え方は Aristotle や Horace を一歩もでていないと貶される理由がここにある。しかし彼の思考の動きがその範囲内で運動しているのだろうか。劇の場合でも古典への執着のあまり，いわゆる originality が全面的に欠如していると断言できるだろうか。ここでは当面の問題，後の文学批評に限って眺めて行くことにする。

話が少し飛躍するが，George Watson 氏が文学批評を三つの面に分けているのは注目してよい。'legislative criticism, と 'theoretical criticism' と 'descriptive criticism'[3] である。もちろん人為的な分類で，そのおのおののあいだに画然たる環境界線は引きえないが，おもしろい着眼である。'legislative criticism' とは詩人に書き方，またはよりよき書き方を示すもので，イギリスでは Ben Jonson より一つ前の時代に多い，とされる。とにかく，私は文学批評家なるものは，他の二つのいずれが欠如していても完全には成立しえないと信じるので，Ben Jonson の批評も，彼の理論と実践批評の二つの面から考察して行こととするものである。これで，Jonson に文学批評家のラベルをはろうとするのだ。

II

Timber (1620—35？) と普通いわれているもの，full-title は，*Timber: or, Discoveries; Made upon Men and Matter: As they have flow'd out of his daily Reading; or had their refluxe to his peculiar Notion of the Times* という書物は，読書の際の彼の心おぼえであったとも考えられる。古代文学の抜萃に自分の批評やら感想が入り混って 171 章より成り立っている。たしかに 'a stock book of established classical ideas collected and translated'[4] だというのは名言である。この言葉は裏を返せば，古典よりの剽窃，影響が濃厚すぎ

るということでもある。しかし、彼は古典の基盤から出発せねば，批評家は主観に陥る部分が多く危険だと考えていたのである。[5] そして，この書は彼だけでなく，十七世紀の批評を考える上で重要なものだし，批評史の図式には当然登場せしめなければならないものだ。この中には人生論的なものが多いが，いまそれをまったく切り捨てて，そこに散在する詩論を私が一応体系づけてみよう。

彼は詩は 'colours or accent' なしに 'sense' だけで成立するものだと考えていた。[6] しかし，ここでは否定できる面を先にふり払おうとして，

"*Indeed,* nothing is of more credit, or request now, then a petulant paper, or scoffing verses; and it is but convenient to the times and manners wee live with, to have then the worst writings, and studies flourish, when the best begin to be despis'd. *Ill Arts* begin, where good end."[7]

という。また，詩の本質についての考察を表面に押し出さず，詩人というものから考察にはいる。そこから，順序をふんで詩の創作過程を考えるという方向にむかう。もちろん，上に示した詩の理念が常に背後にあるわけだ。まず詩人とは何ぞや，という問題についての彼の説を傾聴しよう。

"A *Poet* is that which by the Greeks is call'd κατ' εξοχήν, ὁ Ποιητής a Maker, or a fainer: His Art, an Art of Imitation or faining, expressing the life of man in fit measure, numbers. and harmony, according to *Aristotle:* From the word ποιεῖν which signifies to make or fayne. Hence hee is call'd a *Poet,* not hee which writeth in measure only, but that fayneth and formeth a fable, and writes things like the Truth. For the Fable and Fiction is,as it were, the forme and Soule of any Poteicall worke or *Poeme.*"[8]

一見してこの論述は， Sidneyの，

"The Greeks named him, Ποιητ'ήν, which name hath as most excellent, gone through other languages, it cometh of this word Ποιεῖν which is to make."[9]

からの展開であることがわかるだろう。ここでは当然のこととして 'imitation' ということが問題になっている。しかし，それより先に考慮すべきだと思うこと

がある。それは，詩人の創作過程については，詩人そのものに 'imitation' を含めて四つの必須な特質[10]を考えるべきだ，と Jonson が語っていることである。彼は，善を認める life の慣習に対比させ，学識を認める speech の慣習があると考えるのだ。尤も，これは必ずしも芸術と道徳の問題ではない。この点は Sidney とは異るのである。Sidney の方は，詩人は，哲学者がなされるべき事柄というものに完全な 'picture' を与えるものだといって，つぎのように結論づける。

"I say the *Philosopher* teaches obscurely, so as the learned onely can understand him:... but the Poet is the food for the tendrest stomacks, the Poet is indeed the right popular *Philosopher*."[11]

これは Aristotle や Horace の流れに立っていて，Sidney の独創ではない。が，彼の信念はこの通りなのであって，人を喜ばせる要素を文学に認めつつも道徳の面に傾斜をもたせているのだ。しかし，Ben Jonson の上に述べた場合は，まったくの対比にすぎず，類推の作業上の行程だけのことなのである。

Bacon も，詩は，歴史と哲学と並列するものとして，人間の学問の一部であるとする。そして，詩は宗教や道徳上の教養を含めて人間の教化に適するものが最善だとした。[12] この両者の考えから Jonson はかなりの展開を示している。もっとも詩は徳と最も親しい関係にある，[13] とかいって，この間にかなりの浮動性はあるが，詩の道徳からの脱却ということも若干考えていたようだ。ここに無意識のうちにも，Jonson が自己の批評意識を先人のそれより発展させ，そこに彼の文学論をたてようとした，ととることが可能になるだろう。

ところで，上述の類推の作業から，Jonson は人間の性格とか習慣にも美点があるが，詩人には特有の美点がある，と一歩問題の核心へと進んでいる。それが詩的良心というものだ，と彼はいう。それでは詩人に要求される四つの点とは何であるか。

'Nature' ということが大きく取りあげられる。第一のもつべき資質は 'Nature' の一面，天から授けられた資質をいう。これはどの批評家も，いいかたは異なるにせよ，まず考えていることだろう。ところが Jonson の残りの三つは，いずれも詩人の行為に関してのことなのである。この点からして，彼も当然，文学の伝達の問題を意識していることが理解せられる。このように考察を進めて行くと，彼の文学にはエリザベス朝に多くあった 'legislative criticism' 的な要素がかな

りの濃度を示していることが汲みとれよう。しかし，その背後には，彼の古典の上に立った 'theoretical criticism' の目が光っているのである。彼は真理と効用は究極においては同一物だと考えているようだ。

私の批判を先に出した恰好になったが，彼のいわゆる詩人の行為というものの考えの本質を眺めて行こう。

第二の資質，行為の面からいってはじめに出てくるのが，'Natune' のもう一つの面ともいえるものである。Jonson の言葉をそのまま引用すると，

"*First*, wee require in our *Poet*, or maker,... a goodness of natural wit. For wheras all other Arts consist of Doctrine, and Precepts: the *Poet* must bee able by nature, and instinct, to powre out the Treasure of his minde."[14]

ということになる。'first' というのはいうまでもなく行為の中での 'first' なのである。この言葉にはかなり，想像力の作用を認めているようだ。そして，これは 'perfection of nature'[15] へと通じるものなのである。この場合，'wit' というのは形而上詩の背後を貫く精神である 'wit' とだいたい同義であり，Aristotle の「修辞学」に認められる驚愕と対照[16]の面から由来するものなのである。十七世紀では Abraham Cowley が *Of Wit* という詩において，"In a true piece of Wit all things must be,/Yet all things there *agree*./As in the *Ark*, joyn'd without force or strife,/All Creatures that had Life."[17] と語っているのが，この精神をよくあらわしている。周知のように，後に Drydenが 'wit' を 'Wit-writing' と 'Wit written' にわけたのは[18]，この前者，すなわち，'no other than the faculty of imagination in the writer' から後者，すなわち，'that which is well defined, the happy result of thought or product of imagination' へと至る過程，つまり詩人の創作過程に重点を置いているのである。

当然，先にいうべきことではあったが，ここでいう 'Nature' とは外的自然ではなく，ストイックな宇宙の秩序であり，すぐれた実在を指しているのである。それは外的自然も人間の本性も含む普辺的な恒久性をもつという観念である。ある意味では形而上的なものである。十八世紀人が考えていたように[19]，古典も普辺的な恒久性をもつから，'Nature' は古典とも調和するという考えは，すでに Jonson ももっていたことが理解できる。なぜなら，'perfection of nature' はそれだけでは充分ではなく，これを可視的世界にもってくるべきだ。そのためにはそれに調和する詩人の資質を行使せねばならぬ，と彼はいっているからである。

彼が古典の上に立ったのは 'Nature' を基準とする意味でも，彼の気持は理解できるのである。ただ，詩人の資質の行使のうちには，当然，想像力の問題が含まれることになる。このことは後で考察することにしよう。

第三が模倣，すなわち 'imitation' の問題である。'Nature' が基盤となっているのは上述の通りであるが，これは彼の説の中で一つの中核をなすものだから少し詳細に検討してみたい。

III

まず，彼の述べるところに耳を傾けよう。

> "*Imitation,* to bee able to convert the substance or Riches of an other *Poet* to his owne use. To make choise of one excellent man above the rest, and so to follow him till he grow very *Hee*, or so like him as the Copie may be mistaken for the Principall. Not as a Creature that swallowes, what it takes in, crude, raw, or undigested: but, that feeds with an Appetite, and hath a Stomacke to concoct, devide, and turne all into nourishment. Not to imitate servilely, as *Horace* saith. . . but to draw forth out of the best and choisest flowers, with the Bee, and turne all into Honey, worke it into one relish and savour: make our *Imitation* sweet."[20]

かなり修辞的に述べているが，その意図するところは明白である。ところで，この説は Sidney よりの展開ともいえる部分が多い。だから，これと対照してみるため Sidney にの模倣説をのぞいてみよう。

> "*Poesie*. . . is an Arte of *Imitation,* for so *Aristotle* termeth it in his word μίμησις, that is to say, a representing, counterfeiting, or figuring foorth: to speake Metaphorically, A speaking *Picture*. with this end, to teach and delight."[21]

ここでの模倣は，life の事実を写す以上のものが要求されている。だから，Sidney 模倣という言葉が，すなわち，創造的能力を行使するプロセスを示す，と考

えたことが推察できるだろう。この考え方は，図式的にいえば，Jonson から Dryden へ流れて，彼によってもっとも合理化されることになった。Jonson の説はこの中間に存在するのである。

ただ，これだけは強調しておこう。上に引用した箇所からも理解される通り，Jonson の模倣は単なる先人の真似ではない。先人のよいところを利用するということなのだ。[22] 古人から出発するのではなく，自分の精神的経験を作品に示すという行為を正しく導くために，従って行かねばならぬ方法として，古人を案内人とするというのである。

ここまでくれば，Jonson 自身，明確な定義を下しているわけではないが，想像力の問題がその背後に潜んでいることはいうまでもないであろう。Ben Jonson のいう詩人の行為はすべて想像力という問題と繋がっているのだ。

もちろん，ここでいう想像力とは Shakespeare が *A Midsummer-Night's Dream* の中で語っている，"As imagination bodies forth/The forms of things unknown, the poet's pen / Turns them to shapes and gives to airy nothing/ A local habitation and a name."[23] というように，自分の想像力で不羈奔放に大空を馳けめぐるというのをとっているのではない。むしろ，Bacon のいう想像力にきわめて接近しているのだ。Bacon はつぎのようにいう。

> "Poesie is a part of Learning in measure of words the most part unrestrained, but in all other points extreamely licensed, and doth truly referre to the Imagination, which, beeing not tyed to the Lawes of Matter, may at pleasure ioyne that which Nature hath seuered, & seuer that which Nature hath ioyned, and so make vnlawful Matches & diuorses of things."[24]

ここで，想像力とは実際に起ったことを起るかもしれない，または当然起ると思われるものに変質せしめる作用を意味している。一種の構成力とも考えることができよう。だから，Bacon は，詩は 'reason' と 'imagination' の両方に訴えるべきものだと考えるのである。しかし，彼は自然の事実を一つ一つ丹念に集積する経験主義者だったから，想像力の中にある飛躍性というものにはあまり注目しないのである。Jonson も，物を書くには，'cleane composition of sentence' などの他に，'an illustration by tropes and figures, weight of Matter, worth of Subject, soundnesse of Argument, life of Invention, and depth of Judgement'[25] が必要だといっているが，Bacon の想像力説の影響をうけたとい

ってさしつかえないだろう。彼は想像の過程を考えて，"The conceits of the mind are Pictures of things, and the tongue is the Interpreter of those Pictures."[26] というのである。

Bacon の影響といえば，Jonson のいう詩人の行為の三番目の中により明確に認めることができる。これは彼のスタイルの面における考察とも結びつくものである。

> "That which wee especially require in him (=the Poet) is an exactnesse of Studie and multiplicity of reading, which maketh a full man, not alone enabling him to know the *History* or Argument of a *Poeme* and to report it, but so to master the matter of Stile, as to shew hee knowes how to handle, place, or dispose of either, with *elegancie*, when need shall bee."[27]

'full man' になるのに必要，云々という点からだけでも Bacon の流れに立ってものをいってることが理解できよう。Jonson の劇作，詩作の態度は，"Drinke to me, onely, with thine eyes," ではじまる有名な詩をみても，上の信念の実践であったことをわれわれは知る。この詩は紀元三世紀ごろの Philostratus の 'love-letter' を改作したものだとされるが，Jonson の詩のスタイルはまさに 'Studie' の産物だった。

Bacon の詩論は，詩に存在しうる教養的内容を軸としているので，一つの傾斜があることはさほど寸言した。Ben Jonson は，一方ではこの問題に注意を払わないところもみえるが，他方では，Bacon の anti-romanticism をうけ入れている場合もある。[28] その点，彼の説にもかなりの振幅はあるが，Dryden の詩論などに比べるとむしろゆれが少いともいえる。法則というものを立てた以上はその中で移動しても，法則そのものには忠実だったのである。その理由は彼のもつ，'a robust temperament and plain common sense'[29] からも由来するだろうか，Atkins 氏のいうように，"As a literary theorist, he has been loosely described as a 'champion of rules'."[30] なのであり，彼の窮極の狙いは 'ordered harmony'[31] に戻ることであったといえるだろう。

それでは，彼はこのような批評原理をひっさげて，例えば，個人の作家をとりあげる場合に，どのような批判的判断を示すのだろうか。作家または作品とのめぐり逢いからはじまる，彼の批評の実践面，すなわち 'descriptive criticism' を

IV

エリザベス朝に批評があったのは既述の通りだが，rhyme についての具体的な論争などは別として批評そのものを考察，批評するということはなかった。そういう意識（厳密には意識のない状態）によるのか，純粋な意味での 'descriptive criticism' は存在しないともいえる。なるほど，'existing literary work' の 'analysis'[32] らしきものはある。しかし，それはそれ自身が目的ではなくて 'legislative' なものへの例証として挙げてあるにすぎないのである。これは，当時の読者層が，劇の場合を除いては，宮廷を中心としたこじんまりしたものだったからであろう。また，劇の場合も，必ずしも書かれたものを必要としなかったからであろう。だが，十七世紀になって，大衆と作家の間の距離がやや拡がって来たと考えられる。文学史的図式でいえば，スペインの無敵艦隊を撃破して以来昂揚されつづけた国民精神が沈静に傾いたためか，内乱でイギリス国内が暗雲に蔽われたためか，とにかく思想的に冷静な批判を示すようになったのである。このような批評への認識が先か，前者の状態が先かは判定するのがむつかしい。非常にデリケートな相関関係をもっている。しかし，とにかく，作者と読者の中間的存在物として批評家の役割が認識されるようになったことだけは実事である。そこから，'descriptive criticism' が存在するようになるわけだ。

Jonson は詩人について判断できるのは詩人である，だが，すべての詩人ができるとはかぎらない，と考えた。そして，Jonson はその役割を自分自身にあてはめている。上にいったような意味での批評家としての意識を自己の中にもったのはイギリスでは Jonson がはじめだといっても過言ではあるまい。先ほどのべたように，彼は *Every Man in His Humour* の序文で，「三一致の方則」について意見をのべ，Shakespeare を含めて，これを破っている当代の劇作家を痛烈に揶揄している。考えるところは Sidney と同意見なのだが，Sidney 以上に諷刺が濃厚で，Sidney とは異って個人攻撃の面が強い。劇作家として名声をもった Jonson が同僚の作品に文句をつけたいという動機もどうも伺われない。だが，これも諷刺の衣でまとった 'descriptive criticism' であったといえるだろう。

この面の考察にあたって，Jonson の Shakespeare 批評からはいって行こう。1618年から翌年にかけてスコットランドを旅行した Jonson は William Drummond of Hawthornden の款待をうけ，有名な *Conversations* (1619) を残し

た。この中で，"Shakespeare wanted arte."[33] といっている。また例の *Timber* の中では，Shakespeare は何でも書き流して，一行も推敲しないことを仲間がほめたのに対して，"My answer hath beene, would he had blotted a thousand."[34] といっている。この二つの交点から確実に推定できることは，Shakespeare の表現技術の自分勝手さ，古典にのっとらぬ欠点（Jonson の立場からしての欠点）をいっているわけだ。彼の信念は *Alchemist* の序にあるように意識的な芸術，すなわち古典にのっとり選択と中庸の精神を基本としたのである。それはとりもなおさず彼の劇作の態度であった。彼は生産不能の批評家ではなかったのだ。これは，Jonson の 'theoretical criticism' の体系がかなり安定していたことをも示すもので，自己の立場，'Jonson's inborn classical tendencies'[35] を鮮明にうちだした 'descriptive criticism' なので，相手につきつける 'legislative' なものではないのだ。

彼は自分の批評体系，例えば「三一致の方則」はまもるべしというと，自己の作品にはそれを厳守した。Thomas Campion などとは異なり，彼の理論と実践には彼なりの絶対的統一があった。ただし，彼の Shakespeare 批評は neo-classicism の文学理論の発達とともに，おそらく彼自身が考えていた以上の意義と重みをもつことになった。Jonson 自身は Shakespeare の長所は長所として充分に認めていたのではあったが。

もう一つ，彼の同時代の詩人に対する Jonson の批評的判断を示すものとして Donne を対象とした 'descriptive criticism' を眺めよう。彼はこの詩人を，'the first poet in the world in some things' と語る。つづいて，"His verses of the Lost Chaine he heth[36] by heart, and that passage of the Calme."[37] という。さらに，"Affirmeth Done to have written all his best pieces ere he was 25 years old."[38] と述べている。Donne の *Songs and Sonets* がそれにあたることは現在の時点でも同様である。そして，先にも 'conceits' について私が引用したように，Donne の詩の論理的な推理過程を伴う，いわゆる 'metaphysical conceit' の存在を事実として認めていたと考えられる。とにかく，上に示したような描写は，内容的にはもちろん，形式面でも完全に記述批評であり，よき作品との出逢いから批評が生じるのである。彼は，さらに，Donne の *Anniversarie* についてつぎのように批判する。

"Done's Anniversarie was profane and full of blasphemies; that he told Mr. Done, if it had been written of the Virgin Mary it had been

something; to which he answered that he described the Idea of a Woman, and not as she was. That Done for not keeping accent, deserved hanging.[39]"

理想の女性像云々，というところは現在でも定説になっており，Jonson の観点の正確さが伺われる。だが，Jonson がこの詩人の conceit を含む実験的な詩型に悩まされ，完全について行けなかったことは 'deserved hanging' という言葉からも推察できる。Donne は推理をおこなって過論に陥ると考えたのだろう。そこには虚心担懐な発言でなく一つの意図がある。だから，

"Done himself, for not being understood, would perish." 39

といっているわけだ。彼の狙いの 'ordered harmony' からそれ，中庸ではなく極端へと走っているからなのである。

しかし，私はこれは Jonson の批判的判断の誤りだと明言したい。それは，'ordered harmony' を基準とした Jonson の詩作と Donne のそれを比べてみれば一目瞭然である。中庸と写実的傾向をとる *Elegy* (XVⅢでもXIXでもよい) を眺めてみても諷刺は弱く平板である。もっとも，先に引用したように，Donne の偉大さは Jonson にある程度までアピールしていた。'wit' の精神とその本質も彼なりに消化していたことも前述の通りである。理解はあっても同情，または共感できなかったところはどこか。それは，Shakespeare 批評の場合でも大同小異だが，一つの作品が作家の心象から産み出される過程における，想像力，構成力の作用が完全には理解されなかったためである。これらは，彼の本質とは異質のものだった，と考えてよかろう。

Bacon の想像力説も同様だが，自然観察からくる構成力を超える飛躍的な精神の活動というものを彼も軽視したのだ。想像力が創造力に通じるという積極的な詩論は，なるほど，その芽生えは Jonson の中にすでに認められるとはいえ，Dryden に至ってやっと軌道にのるのである。Jonson は批評家兼作家でなく，作家兼批評家であった。だから，理論と実践の統一を図った彼の劇作態度にもこのことは充分に伺えよう。ここに彼の限界があった。

V

"He (=Jonson) is the first English man of lettters to exhibit a nearly

complete and consistent neo-classicism. His historical importance is that he throws out a vigorous announcement of the rule which is the next generation Dryden is to be engaged in politely rationalized recessions.[41]"

Literary Criticism: A Short History の中に見出される章句である。至言だと思う。しかし，この言葉の中には前代との関連を示すものはない。その点を補足すると，彼は Sidney よりの展開を求め，Bacon の anti-romanticism をうけいれたといえる。しかも，この小論で述べたように，古典の理論体系の中で自分なりに展開を求めた。Jonson の批評は後の時代の理論展開への一つの基礎となったという点で重要さが存する，といえるだろう。一人の人間に一つのラベルをはることはきわめて危険だが，たしかに彼は neo-clacissism の流れにある，といえるだろう。

文学史的図式からいって，可視的世界にまず存在するはずの作品，変化した時代精神をまっこうから浴びて立っている文学批評の道標はつぎの三つである。*Timber, Biographia Literaria, Speculations* がそれだ。これらは，それぞれ一冊の書物としては形式的にも統一がなく，むしろだらしのない本であることは奇妙な一致である。しかし，それだけに却って後の世代の人がそこから理論を展開させることができたのかもしれない。

ただ，十七世紀の思想に与えた影響の程度からいうと，Jonson より Bacon の方がはるかに大であった。とくに理性が想像力（空想的という辞をつけると誤解を招くだろうが）とってかわる過程に影響を与えたのは Bacon であった。[42] 彼は想像力を 'a messenger betweeen sense and reason'[43] として定義した影響がはっきりとあらわれているのである。しかし，文学批評の面からみると Bacon には 'descriptive criticism' は皆無である。彼の本質は明らかに別の分野にあったのだ。これに対して，Jonson は何よりもさきに文学者であった。文学者として文学を批評したのである。模倣の論理をのべても，"And not thinke, hee can leap forth suddainely a *Poet*, by dreaming hee hath been in *Parnassus*, or, having washt his lipps... in *Helicon*."[44] などといえるのは文学者に限るだろう。文学作品を批評するにあたっても，単に観念的ではなく，その作品とのよき出逢いが先行しているわけなのだ。彼は文学批評の実態を理解し，自分が文学批評をするし，またできる人間であることを意識していたのだ。自分

は文人としてもすでに一家をなしているという確信もあったのだろう。その理念では，T.S.Eliot と共通の場があろう。

そして，この小論の結びとして，ここでひじょにあらっぽい対比を許していただきたい。それは分水嶺のこちら側にある批評家をさらに図式化して，T.E. Hulme に対する T.S. Eliot は，すなわち，Bacon に対する Ben Jonson である，ということなのだが，どのようなものであろうか。

注

1 R.A. Scott-James: *The Making of Literature,* p.127.

2 *Every Man in His Humour.* これは1616年の改訂版の 'Prologue'.

3 George Watson: *The Literary Critics,* pp. 9—18.

4 W.K. Wimsatt & Cleanth Brooks: *Literary Criticism: A Short History,* p.176.

5 Cf. Herford & Simpson (ed.): *Ben Jonson,* vol. II, p.445.

6 Cf. J.E. Spingarn: *Critical Essays of the Seventeenth Century,* vol. I,p. 214.

7 Herford & Simpson: *op. cit.,* vol. VIII, p.7.

8 *Ibid.*

9 A. Feuillerat (ed.) : *Sir Philip Sidney,* vol. III, p.7.

10 'by nature, by exercise, by imitation, by Stude', Herford & Simpson: *op. cit.,* vol. VIII, p.636. なお，Wimsatt & Brooks は *op. cit.* で五つといっているが，Jonson の上の言葉に従い nature が両面にまたがっているのをあえて一つにみなした。

11 Feuillerat: *op. cit.,* vol. III, pp.15—6.

12 Cf. Spingarn: *op. cit.,* vol. I, 'Introduction', xi.

13 Cf. Herford & Simpson: *op. cit.,* vol. VIII, p.636.

14 *Ibid.,* p.637.

15 *Ibid.*

16 Cf. Aristotle: *Rhetoric,* iii, 9—11, 255—66.

17 Cowley: *Of Wit,* 9th st.

18 Cf. Dryden: *Heroic Poetry and Poetic Licence.*

19 Cf. Basil Willey: *The Eighteenth-Century Background,* (Penguin Bk), pp. 24—31.

20 Herford & Simpson: *op. cit.*, vol. VIII, pp. 638—9.

21 Feuillerat: *op. cit.*, vol. III, p.9.

22 矢本貞幹, 「イギリス批評, 十七・八世紀」p.39参照。

23 Shakespeare: *A Midsummer-Night's Dream*, V,i,ll.12—17.

24 Spingarn: *op. cit.*, vol. I, p.5.

25 Herford & Simpson: *op. cit.*, vol. VIII, p. 628.

26 *Ibid.*

27 *Ibid.*, p.636.

28 Cf. *Ibid.*, p. 627.

29 James Sutherland: *English Satire*, p.18.

30 J.W.H. Atkins: *English Literary Criticism: the Renascence*, p,333.

31 *Ibid.*

32 Watson: *op. cit.*, p.14.

33 Spingarn: *op. cit.*, vol. I, p. 211.

34 Herford & Simpson: *op. cit.*, vol. VIII, p.583.

35 Atkins: *op. cit.*, p.261.

36 Jonson 自身のこと。

37 Spingarn: *op. cit.*, vol. I, p.212.

38 *Ibid.*

39 *Ibid.*, p.211.

40 *Ibid.*, p.213.

41 Wimsatt & Brooks: *op. cit.*, p. 181.

42 G. Williamson: *Seventeenth Ceutury Context*, pp.202—5.

43 *Ibid.*

44 Herford & Simpson: *op. cit.*, p.639.